Title	キリスト教教育におけるアクティブ・ラーニングの試み：参加型授業としてのキリスト降誕劇
Author(s)	佐野，正子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :4-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5285
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

[研究ノート]

キリスト教教育におけるアクティブ・ラーニングの試み
―参加型授業としてのキリスト降誕劇―

佐野　正子

はじめに

近年では大学の授業におけるアクティブ・ラーニングの重要性が認識され、講義形式の授業だけではなく、グループディスカッションや学生によるプレゼンテーションなど、学生が能動的に授業に参加する授業形態が求められるようになった[1)]。しかし、大学のキリスト教科目では、知識伝達型の授業形態が主流であり、学生参加型の授業形態が取り入れられることは、いまだ例外的である。キリスト教科目において参加型授業を行いにくい理由としては、聖書の内容やその背景、神学的概念、キリスト教の歴史等の解説が中心となるという内容的な制約が挙げられる。聖書やキリスト教史に関する各種視聴覚教材が作成され、授業の中に導入され始めたとはいえ、学生が能動的に参加する授業を実施することはなかなか難しいというのが現状ではないだろうか。

しかしながら、キリスト教のメッセージが学生一人一人の心に届くためには，講義をただ座って聴くという受動的な学びのみではなく，学生の側からの能動的な学びによる気づきの体験を取り入れることが望ましいであろう。本稿は、キリスト教教育におけるアクティブ・ラーニングの試みとして、筆者が「キリスト教概論」において、ドラマ教育を取り入れた実践例の紹介である。筆者は、2011年度および2012年度に児童学科の「キリスト教概論」において、また2013年度および2014年度にはこども心理学科の「キリスト教概論」において、学生によるキリスト降誕劇を取り入れた。

1.　キリスト降誕劇の教育的効果

さかのぼると中世ヨーロッパでは受難劇や降誕劇等の宗教劇が盛んに上演されていた。中世において演劇は、「書物や造形美術に劣らず、いやそれ以上に民衆の教育や文化の創造に大きな役割を果たし」、「演劇の持つ人間的ふれあいをとおしてキリスト教の教えを体得するという点」で教育的効果を持っていたことが指摘されている[2)]。当時宗教劇は、文字が読めない民衆に対して、聖書の内容の理解を助ける手段として用いられていたのである。伝統的にキリスト教教会では、聖書物語を劇で演ずるということに教育的効果を見いだしてきた。受難劇や降誕劇を行うという教会の伝統は今でも続いている。例を挙げると、南ドイツの村オーバーアマガウでは、十年に一度村人によって受難劇が上演されることで有名である。日本では教会の子ども礼拝（教会学校）や、キリスト教系の小学校・幼稚園・保育園でクリスマスには降誕劇が盛んに演じられている。筆者が児童学科の「キリスト教概論」に降誕劇を取り入れたきっかけは、児童学科には保育士を目指している学生が多く、将来子どもたちに降誕劇の指導をする可能性があると考えたからである。実際に降誕劇を授業に取り入れて実感したことは、学生自身にとってクリスマスの出来事の理解が深まるという教育的効果があることであった。

2.　「キリスト教概論」におけるドラマ教育の導入

今日初等・中等教育において、「演じる過程を中心とした学習手法」としてのドラマ教育への関心が高まっている[3)]。小・中・高等学校の学習指導要領において、児童生徒の「生きる力を育む」こと、そして問題解決学習とそのために必要な思考力・判断力・表現力の育成が目標として掲げられて、新たな授業改革が進み、その流れの中でドラマ教育が徐々に取り入れられているという[4)]。筆者はこの手法を大学におけるアクティブ・ラーニングとして「キリスト教概論」の授業にも取り入れられるのではないかと考えた。

12月のクリスマス礼拝の前の２週間、「キリスト

教概論」の授業の２時間分をクリスマスに関する授業としてキリスト降誕劇の準備と実演に充てた。カリキュラム上時間的制約のある中で効果的に降誕劇を取り入れるにはどのようにしたらよいかを工夫した。その記録が以下のものである。

（１）活動のねらい

聖書に記載されたクリスマスの出来事を体得し、深く理解することがねらいである。

（２）テキストと小道具

テキストは、台本として聖書（新共同訳）の該当箇所を一枚のプリントに印刷したものを配布した。聖書の言葉はアレンジせずに、あえてそのまま用いた。

小道具は、最初の２年間は、マリア、ヨセフ、羊飼い、学者のかぶり物や、羊飼いの杖、学者の贈り物、天使の羽等、以前大学のクリスマス礼拝の降誕劇で使ったかなり本格的な物を用いた。後半の２年間は、小道具を教師が用意せず、グループごとにその場にある物を用いて、学生たちが工夫しながら演出を作り上げていった。たとえばマフラーやスカーフを頭に巻いたり、羊飼いの杖の代わりに傘を使ったり、学者の贈り物にペンケース等を用いたりしていた。

（３）劇の構成

降誕劇は四幕の構成とし、第一幕はルカによる福音書１章26節-38節の天使ガブリエルがマリアにキリストの誕生を告げる場面（登場人物はマリアと天使）、第二幕はルカによる福音書２章１節-７節のキリストの誕生の場面（登場人物はマリアとヨセフ）、第三幕はルカによる福音書２章８節-20節の天使が羊飼いにキリストの誕生を告げ、羊飼いたちがキリストの誕生を祝いに来る場面（登場人物は羊飼いたち、天使、天の大群）、第四幕はマタイによる福音書２章１節、９節-12節の東方の占星術の学者たちが星に導かれてキリストを拝みに来る場面（登場人物は学者たち、星、マリア、ヨセフ）である。

授業２時間分で降誕劇の準備と実演を行うために、聖書朗読者（ナレーターとセリフ役）と役者を分けた。役者はセリフを覚える必要がなく、朗読に合わせて演技をすることだけに徹することにより、練習時間を短縮することができるからである。そしてクラスの全員が劇に参加し、他のグループの観客となることとした。

（４）授業の流れ

①導入

１時間目の前半で、教師によるクリスマスの出来事の概略と背景の解説を行う。

②展開

１時間目の後半で、いくつかのグループに分かれ、グループワークを行う。まずグループ内で聖書を読むことから始め、登場人物を抜き出し、監督と聖書朗読者と配役を決める。グループ内でのディスカッションにより役割分担を決めることは、聖書の内容を各自が注意深く検討する機会となる。役割が決まった後は、学生の監督のもと、劇の練習を始める。

２時間目の授業の前半で、降誕劇の練習の続きを行う。２時間目の後半で、各グループが教室の前に出て、約10分間の降誕劇の実演を行う。学生たちは、クラスメートたちの演技を観て大いに楽しむのみでなく、自分たちのグループとは違う演出があることに気づかされる。

③まとめ

２時間目の最後に、各自コメントシートに、グループワークと降誕劇を振り返り、感想や意見を記す。何人かの学生に感想を発表してもらい、フィードバックを行う。

（５）学生の反応

学生の感想を見ると、「話し合って協力しあえて、自分たちなりの理解ができてよかった」、「聖書の内容がよく分かった」等、多くの学生が降誕劇を準備し行うことによって、クリスマスの出来事の理解が深まったと実感していた。また「自分たちで考え工夫して劇を完成させた過程が楽しかった」、「他のグループが工夫して演じているのを観て、楽

しかった」等、楽しみながら授業に参加している学生が多かったことが分かった。

学生の反応から読み取れることは、学生が能動的に授業に参加することは学生にとって楽しいことであり、授業の内容の理解も深まるということである。

おわりに

キリスト教教育におけるアクティブ・ラーニングの一つの試みとして、「キリスト教概論」における降誕劇を取り入れた授業を紹介した。授業内での降誕劇は、最後の上演が主な目的なのではなく、そこに至る準備の過程で、グループ内の学生が協力し、共同の作業の中で、聖書の内容について理解を深め、内容を表現する体験を通して、クリスマスの出来事に登場する人物や出来事を身近に感じるようになり、各自あらたな発見をすることが主な目的となる。またグループで、一つの劇を作り上げていくということは、協調性やコミュニケーション能力、表現力をも身に付けていくことにもなるであろう。

以上のことから、「演じる過程を中心とした学習手法」としてのドラマ教育をキリスト教教育にも取り入れることは教育効果として有効であると思われる。筆者は以前いくつかのイエスのたとえ話をグループごとに演じさせ、解釈させるというグループワークを試みたことがあるが、今回の降誕劇と同様に、その際も教育効果を実感することができた。このことはまた別の機会に論じたい。このささやかな試みが、キリスト教科目におけるアクティブ・ラーニングの導入について何らかの参考になれば幸いである。

注

1）岩崎千晶編著『大学生の学びを育む学習環境のデザイン―新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦―』関西学院出版部、2014年、88頁。

2）石井美樹子『中世劇の世界』中公新書、1984年、9頁。

3）小林由利子他著『ドラマ教育入門』図書文化、2010年、126頁。

4）同書、129頁。

（さの・まさこ　聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授）